

足立重和 著

►郡上八幡 伝統を生きる

地域社会の語りとアリティ

8・15刊 四六判334頁 本体300円

新曜社

ノスタルジーを身体化する人々の「生きざま」に迫る

構造論と構築論、そのどちらでもないアプローチから地域を抉りだす試み

金菱 清



地域社会はアメーバーのように捉えどころがない生き物である。なんとなくそういうものはあると皆がわかっている。しかし、その実体の定かでないものを調査者はなんとか捕まえようとする。しかし、調査を試みたものなら誰でもわかることがある。だが、マルっと手を取り抜けた生温かい感触だけがからうじて地域社会がそこにあるということを私たちに教えてくれている。捕まえたと思った地域社会はもうそこではない。現地の人の声に耳を傾け、右往左往しながらも長期にわたってフィールドワークを試みた著者の足立重和氏は、人々の生活感覚に根差しながら、まるでウナギのように調査者の手を抜ける出る地域社会の痕跡を執拗なまでに追いかける。そして、ぎゅぎゅっと締めあげながらその漠然とした地域社会の態様を私たちの眼前に曝け出そうとする。

ほのぼのとした情景が浮かぶタイトルとは異なり、本書の核心は、終章にある郡上八幡に暮らしている人々の「生きざま」にある。ヤクザ映画に登場しそうな言葉のために素朴なタイトルへと看板を掛け替えたのである。が、この生きざまという言葉には確かに薄水を踏むような危うさが含まれている。しかし、素朴なタイトルに秘められた任侠道的な生きざまの意味を世間に問うことこそ著者の役割がある。

夏の期間ほぼ毎日開催される郡上おどりは、30万人以上の観光客を招き入れるほど郡上八幡の町にとって一大観光資源になるとともに、国の重要無形民俗文化財の指定を受けるなど不動の地位を確立してきた。その一方で、地元の人々は観光化された踊りから離脱し、盆踊りの本来あるべき姿としての「昔おどり」を志向はじめたのである。

著者は郡上八幡において現行進行形で行われている地域の人々の実践を「ノスタルジー」と呼ぶ。ノスタルジック・セルフ」という概念で、デーヴィスが『ノスタルジアの社会学』でまとめているような過去を思い出して、アイデンティティの連続を確認することで自身(自信)を回復しようとするものである。「失われた10年」と称される経済状況の停滞につれて、「生きざま」に限らず、過去への郷愁へと夢や希望を先導するものは後を絶たない。このよくな過去に対する贊美に対し、過剰な美化といった「嘘」であると暴露されてきた。

しかしながら、本書が貫こうとしている郡上おどりとは対照的に、化財指定によってピーカーに達した郡上おどりとは現地の人々の生きざまの核である「ノスタルジック・セルフ」の独自性は、後ろ向きな過去ではなく、未来指向的で創造的な主体を想定していることである。ここで、主體は、「いま・ここ」において伝統文化が作られる文化構築主義的な現実を後目に、観光化以前に「あのとき・あそこ」で行われていた踊りを「これから」実践されるべき規範とするようアートス(「生きざま」)なのである。画一化し統制されたり見えた昔おどりは、逆にいえば郡上おどりをベースとしてしか現出しえなかつたのである。

現在、地域の観光化が政府主導のもと進められている。上八幡の町は、都市民の安寧供給源として、一方的に位置づけられ、ステレオタイプ化されたまなざしの対象とされる。しかしながら、単に昔はよかったから生まれたのではなく、現在観客で溢れ返る郡上おどりから結果となる。ここで、主體は、「いま・ここ」において伝統文化が作られる文化構築主義的な現実を後目に、観光化以前に「あのとき・あそこ」で行われていた踊りを「これから」実践されるべき規範とするようアートス(「生きざま」)なのである。画一化し統制されたり見えた昔おどりは、逆にいえば郡上おどりをベースとしてしか現出しえなかつたのである。

いえ、どう。その結果、郡上八幡の町は、都市民の安寧供給源として、一方的に位置づけられ、ステレオタイプ化されたまなざしの対象とされる。しかしながら、単に昔はよかったから生まれたのではなく、現在観客で溢れ返る郡上おどりから結果となる。ここで、主體は、「いま・ここ」において伝統文化が作られる文化構築主義的な現実を後目に、観光化以前に「あのとき・あそこ」で行われていた踊りを「これから」実践されるべき規範とするようアートス(「生きざま」)なのである。画一化し統制されたり見えた昔おどりは、逆にいえば郡上おどりをベースとしてしか現出しえなかつたのである。

このように観光における一方的な関係がいったんは成立す

たのである。しかしながら、

このように観光における一方

的な関係がいったんは成立す

たのである。しかしながら、

このように観